

調査対象宝物の樹種同定

伊 東 隆 夫

檜和琴残闕 第1号(北倉181)底板はヒノキ。

檜和琴残闕 第2号(北倉181)底板はヒノキ。

蘇芳地金銀絵花形方几 第3号(中倉177)盤はヒノキ。脚はホオノキか。

粉地金銀絵八角几 第5号(中倉177)ヒノキ。脚は不明。

粉地彩絵長方几 第12号(中倉177)天板、脚ともにヒノキ。

緑地金銀絵長几 第17号(中倉177)天板、脚ともにヒノキ。

檜方几 第21号(中倉177)天板中央はヒノキ、天板側面四方はムクノキ、脚もムクノキ。

檜八角長几 第24号(中倉177)天板、脚ともにヒノキ。

檜長几 第25号(中倉177)天板はヒノキ、縁はカヤ(らせん肥厚あり)。

赤漆八角床(南倉68)脚の横断面のみの観察(挿図1)。ルーペおよびスンプで調べたところ、以下の特徴がみられた。大型の環孔材。孔圏は幅が広い。孔圏外道管の分布や配列は不鮮明であるが斜めに小集団をなして配列している傾向がみられる。放射組織は中庸。これらの限られた特徴からあえて言えばエンジュに近いパターンであった。しかし、正確には柱目面などほかの面も観察しないと断定できない。脚の一部と天板の縁はスギ。

赤漆櫃 第1号(南倉170)すべてスギ。

檜彩絵花鳥櫃(南倉171)すべてヒノキ。

古櫃第13号(北倉183)本体はスギ。横棧のスンプを実施。木口面のみの観察(挿図2)。散孔材。道管は小さいが特に小さくはない。放射組織は壁が厚いためか明瞭で、5 - 6列。樹種を絞り込めない。

古櫃第46号(北倉183)本体はスギ。横棧はケヤキ。大型道管が一行に並ぶ。新生面の色調が赤褐色。長軸面に大きい溝の筋が何本も走る。

古櫃第59号(中倉199)ヒノキに酷似。要再検査。

古櫃第61号(中倉199)全面スギ材。

古櫃第108号(中倉202)全面スギ材。

古櫃第185号(南倉74)天板と側板はスギ。

古櫃第191号(南倉74)スギ。

古櫃第193号(南倉74)本体はスギ。脚のスンプを実施。木口面および板目面の観察(挿図3・4)。大型の環孔材。孔圏道管は1列。孔圏外道管は斜めに配列して分布する。小道管にらせん肥厚がみられる。放射組織は中庸で、放射組織の縁辺に結晶の痕跡がみられる。以上の特徴からケヤキと判断される。天板は補強板でヒノキ。

古櫃第125号(南倉186)目視によれば天板と側板はヒノキに酷似していたが、側板の一部のスンプをとって観察した結果分野壁孔はスギ型を呈したので少なくとも側板はスギと判断される(挿図5)。その他はスギ。

古櫃第128号(南倉186)本体はスギ。横棧のスンプを実施。木口面および板目面の観察(挿図6・7)。環孔材。孔圏部は広い。孔圏外道管は大きい集団を作ることはない。道管は単せん孔。放射組織の幅はきわめて狭い。樹種を絞り込めない。

古櫃第135号(南倉186)本体はスギ。晩材鮮明、木口面で晩材幅にスギの特徴。実体顕微鏡80倍で分野壁孔がスギ型。補強材はスギまたはヒノキの判定困難。

古櫃第139号(南倉186)本体はスギ。脚の元の材は3本はヒノキ。脚に渡した受棧2本はスギ。

古櫃第143号(南倉186)本体はスギ。脚の元の材(No.1)のスンプを実施。木口面のみの観察(挿図8)。散孔材。道管は小さく多い。放射組織は4 - 5列。樹種を絞り込めない。脚の元の材(No.2)のスンプを実施。木口面のみの観察。像は不鮮明。脚の新材(No.3)のスンプを実施。木口面のみの観察(挿図9)。散孔材。道管は大きさ中庸でほぼ単独で分布し、時に2個複合する。道管の大きさや分布からカエデと判断される。ただし、カエデ属特有の木繊維のパターンは確認できていない。なお、材が新しいためか古材に比べスンプ像が鮮明。

古櫃第147号(南倉186)本体はスギ。横棧は散孔材。

古櫃第150号(南倉186)本体はスギ。脚のスンプを実施。横断面のみの観察(挿図10)。散孔材。道管は小さく多い。放射組織の幅は4 - 5列。樹種を絞り込めない。

古櫃第151号(南倉186)本体はスギ。横棧のスンプを実施。木口面および板目面の観察(挿図11・12)。散孔材。道管はやや小さい。道管は単せん孔。道管にらせん肥厚あり。放射組織は異性で壁が厚いためか、明瞭に観察できる。樹種は絞り込めない。

古櫃第156号(南倉186)本体はスギ。横棧のスンプを実施。木口面のみの観察(挿図13)。散孔材。像は不鮮明のため樹種は絞り込めない。

古櫃第160号(南倉186)本体はスギ。脚のスンプを実施。横断面のみの観察(挿図14)。大型の環孔材。孔圏道管は一行。孔圏外道管は斜めに規則的に配列する。放射組織の幅は中庸。以上からケヤキと判断される。

(京都大学木質科学研究所)

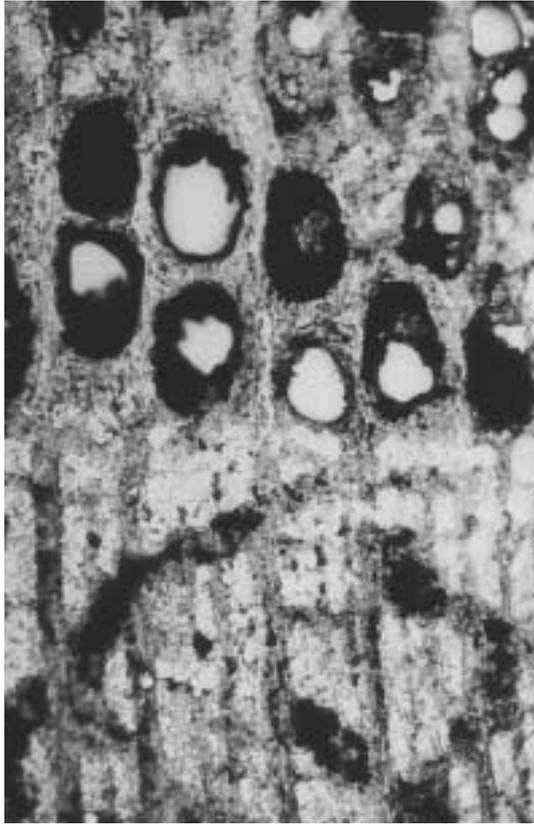


插图1 南倉68 赤漆八角床脚 横断面 (×50)

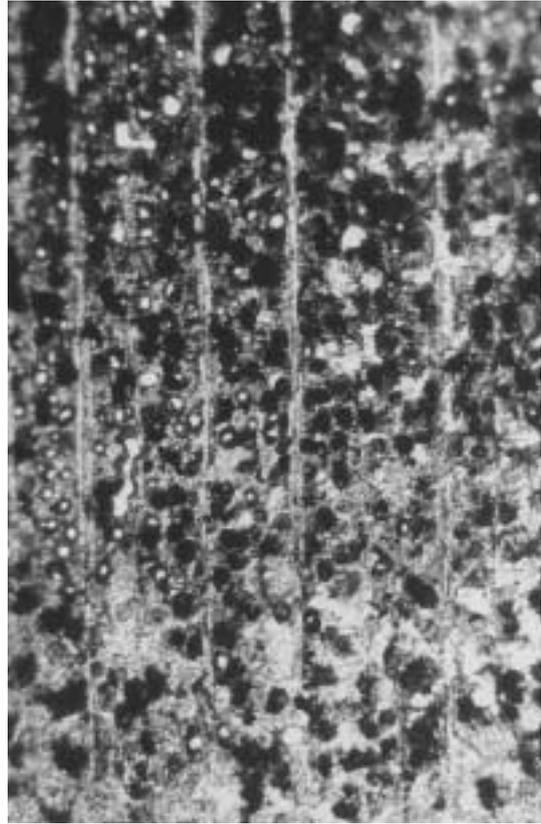


插图2 北倉183 古櫃 第13号 横棧 (×50)

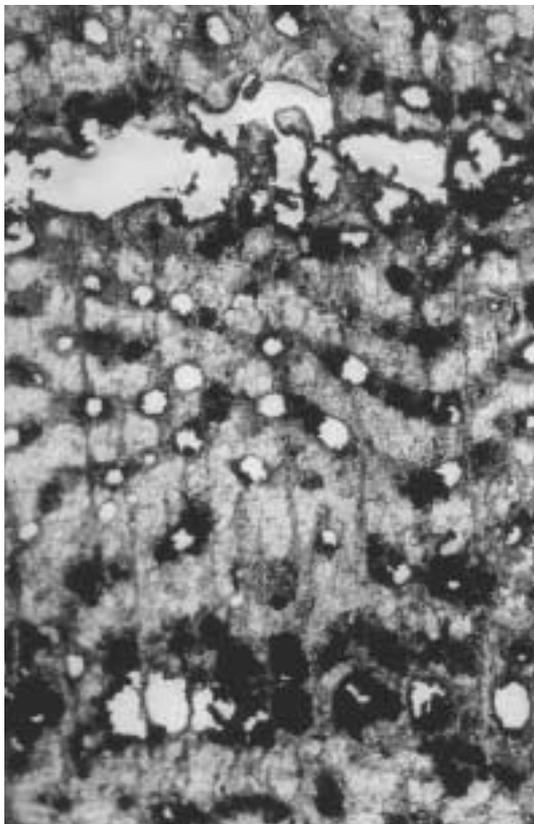


插图3 南倉74 古櫃 第193号 脚 (×25)



插图4 南倉74 古櫃 第193号 脚 (×200)



插图5 南倉186 古櫃 第125号 蓋 側面 (×400)

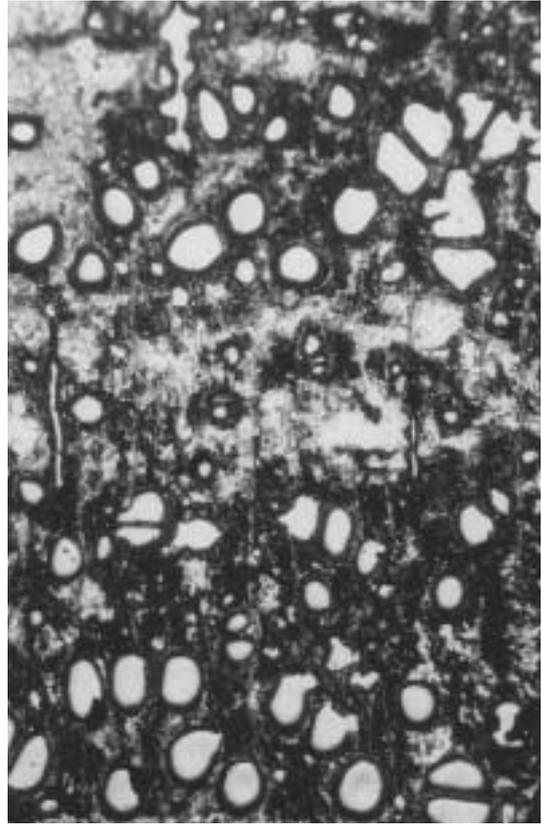


插图6 南倉186 古櫃 第128号 横棧 (×25)



插图7 南倉186 古櫃 第128号 横棧 (×100)

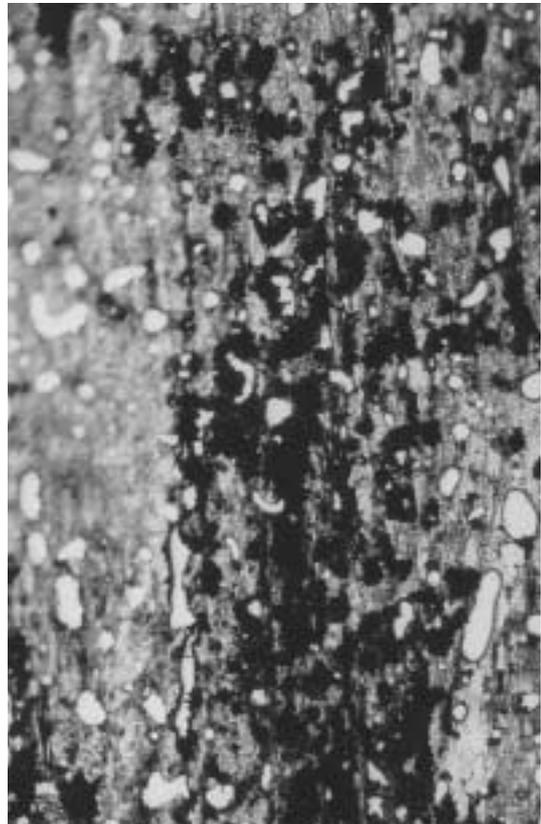


插图8 南倉186 古櫃 第143号 脚 旧材 (×25)



插图9 南倉186 古櫃 第143号 脚 修補材 (×50)

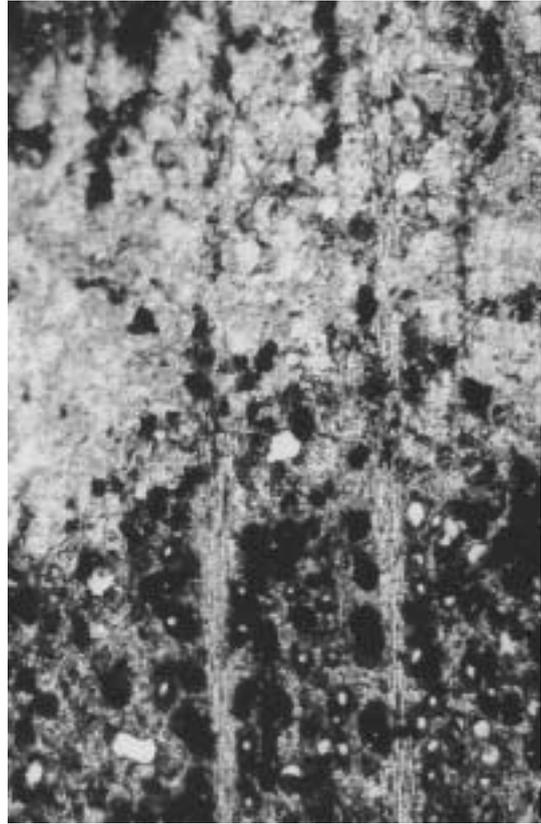


插图10 南倉186 古櫃 第150号 脚 (×50)

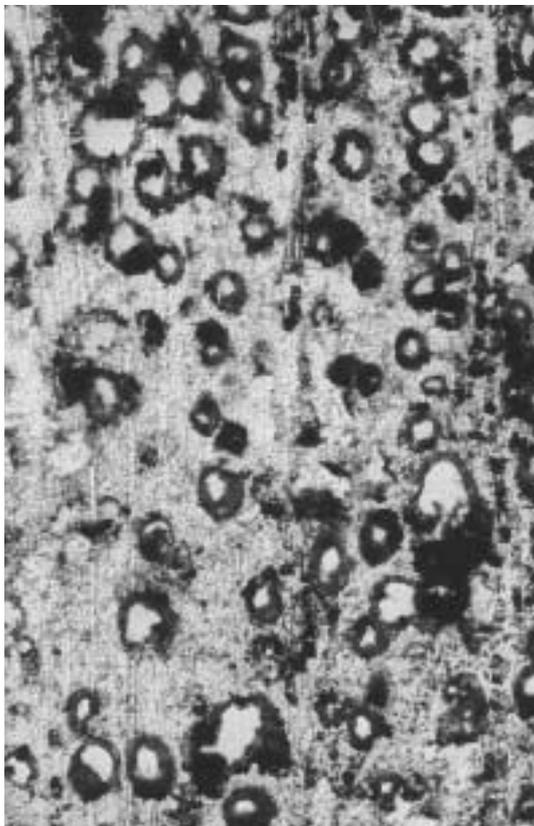


插图11 南倉186 古櫃 第151号 横棧 (×100)



插图12 南倉186 古櫃 第151号 横棧 (×100)

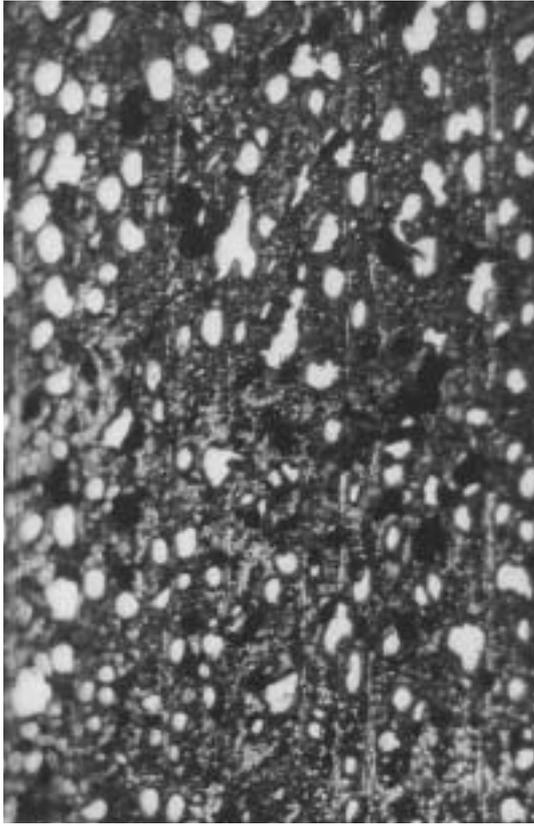


插图13 南倉186 古櫃 第156号 横棧 (×50)

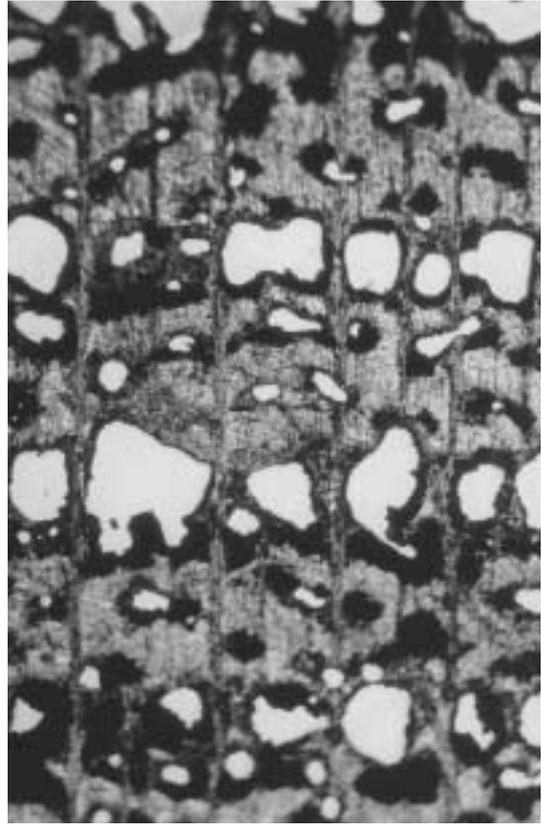


插图14 南倉186 古櫃 第160号 脚 (×25)

年輪年代調査結果へのコメント

中倉30杉小櫃6合は、『正倉院御物目録』の注記に見えるように、近年まで東南院古文書(中倉14)の容器として用いられて来たものである。小櫃それぞれの身短側には、「壺」「式」「参」「肆」「伍」「陸」の貼紙で函番が示され、文書を「第 櫃第 卷」と数字を用いて呼ぶ慣例も、ここに由来する。しかし、この杉小櫃と納められていた文書との結びつきが、どの時点まで遡るかは、従来明らかではなかった。

本来、東南院古文書は、東大寺印蔵に伝来した文書であった。今日の形態の原型となった契機は、12世紀中葉の仁平年間、東大寺別当に就任して間もない寛信の主導で行われた文書整理である。正倉院南倉に現存する公験唐櫃(南倉171檜彩絵花鳥櫃)は、このとき作成された5合のうちの一つで、整理を終えた印蔵文書はこの中に保管されることとなった。ついで130年余り経過した弘安3年(1280)、旧公験唐櫃は、新たに唐櫃5合に造り替えられた。これは、造東大寺大勧進聖守によって行われた作業であった。この仁平 弘安の間、唐櫃5合による文書管理体制はかなり厳密に守られたらしい。

一方、弘安以後は、それがいつまで保たれたか、明証を得ない。鎌倉時代のうちはほぼ同じ状態であったとも想像され、江戸時代には、その分類は乱れていたと言われているが、特に決め手はなかったのである。しかしここで、13世紀後半作成という今回の年輪年代調査の成果を導入すると、小櫃6合による管理の始期と、公験唐櫃造替の時期は、非常に近いものとなる。ここから、杉小櫃の製作も、聖守によって行われたものとする可能性が浮かんで来るであろう。つまり、単純に「5合 5合」の入れ替えではなく、増加分を吸収する「大5合+小6合」を新たに作成したもとと考えられるのである。

(杉本一樹)

中倉202古櫃第108号、南倉74古櫃第174号は形式的に見ていずれも他の古櫃に比べ製作年代が下ると考えられている。前者は短側面には中央に脚が付き、長側面にはそれぞれ2本の脚がつくタイプであり、また後者は短側面、長側面とも各面中央にそれぞれ1本ずつ脚が付くタイプであるが、長側面に付く脚の本数の違いは、長側面の横幅の違いに起因するものと考えられる。いずれの櫃も脚は下端部が外反し、また短側面に付く脚には上部に半月形の透かしを有するなど、両者の共通点は多い。

脚がそれぞれ側板の中央につく4脚の唐櫃を絵画資料から探すと、古いところでは『伴大納言絵詞』に見える。同書は9世紀中頃の事件を題材としているが、成立したのは平安時代末(12世紀)といわれており、この形式の唐櫃は平安時代末までには登場していたものと考えられる。南倉74古櫃第174号の年輪年代1166年(辺材型)、中倉202古櫃第108号の年輪年代1143年(辺材

型)はこの年代とよく一致する。

中倉202古櫃第108号は7～8世紀の材と、12世紀の材が混在し、前者の方が数多く使われているが、古い材も12世紀に再利用されたものと考えることが妥当である。

12世紀の古櫃をのぞけば、古櫃の年輪年代が明らかになったものとしては辺材型として、南倉186古櫃第125号蓋裏(666年)、南倉74古櫃第191号(684年)がある。また赤漆塗りのため辺材・心材の区別がつかなかったものや心材型のもので一応年輪年代が示されたものの年代を見てみると古いもので626年(南倉186古櫃第151号)、新しいもので736年(南倉186古櫃第139号)となる。辺材部約50年分+ α が製作過程で捨てられたと見れば、8世紀の前半を中心に、その前後も含むやや広い年代幅の製品が混ざっていると考えられ、妥当な年代値と考えられる。唐櫃には細部を検討するといろいろな型式のものがある。これらには製作工房の違いを表すものもあるかも知れぬが、また製作年代の違いを表すものもあったのであろう。

北倉183古櫃第13号と南倉186古櫃第151号、あるいは南倉186古櫃第143号と南倉186古櫃第150号はいずれも同材を共有する兄弟櫃であり、型式、サイズも瓜二つである。このことに基づけばサイズが同じで脚、あるいは棧の形状、鋏などが同じ作りの唐櫃同士は同一工房の同一時期の製品と考えても良さそうである。今回は年輪年代調査が主眼であったため、柾目材以外の材には目を向けなかったが、将来細部型式に着目しながら、板目材の板目模様等を丹念に調べれば、他にも兄弟櫃を抽出できる可能性は高い。

(成瀬正和)

【参考文献】

皆川完一「公驗唐櫃と東大寺文書」(『東京大学史料編纂所報』7、1973)

森哲也「仁平三年東大寺莊園文書目録の基礎的考察」(『史淵』137、2000)

沢沢敬三「『伴大納言絵詞』概説」(『新版絵巻物による日本常民生活絵引 第1巻』、1984)